

言語研究でも数量化やデジタル判断が問題になり、グレーゾーンの排除への懸念があげられている。
荒川区には、荒川がない。

「同一戸籍同一氏」

私は、日本各地の伝統的方言の調査、そしてその実態記録を主たる研究対象としてきた。古くからの伝統方言は、日本の各地で、急激に、そして確実に消滅の道を歩んでいる。その記録の重要性について否定する人はいないであろう。

かつて、ある学会のシンポジウムで、「研究においては、それ相当の“数”が必要であり、かつ、あくまでも**科学的な数量化や類型化が肝要**なのだ」として、私などの研究を強く批判した人がいた。

そのような言辞に対するわだかまり（疑念・不満）は、しかし、三宅和子さんの言及に触れることで解けていったのであった。その部分を掲げる。

20 世紀的発想では、研究は科学的な根拠をもって主張を証明することが求められ、同じ調査や実験をしたら同じ答えが出てくることが必要でしたね。言語研究だとアンケート調査や条件を変えた実験調査などをして結果を数量として数えたりコード化したりして主張の根拠とします。しかし、この数量化やコード化には落とし穴があります。整然としてはいるけど、白と黒の間の灰色部分を無視しなければ白と黒に分けられない。でもその**灰色の部分が私たちのリアリティ**ですよ。21 世紀の今、個別性の強い流動的な現実を生きることへの気づきも高まっています。「科学的」に数量的に見ていくことによってかえって見えなくなることが多いのではないのでしょうか。

（川上郁雄・三宅和子・岩崎典子編『移動とことば』くろしお出版、2018 から）

その後、三宅さんから個人的にもらったお便りの中に、「数の呪縛からは多くの方がなかなか逃れられないようです。私も完全に逃れられないでいるのですが、少なくとも数を掲げて鬼の首でも取ったようにしているのは無神経だと思います。そこからこぼれ落ちることへの着目とか末練とかがないのでしょうか。数では語れないことがあまりにも多いのに。」というつぶやきがあった。

まさに同志を得た思いで、すっきりと晴れた気分になったのである。

さて、荒川区である。区名は「荒川」ではあるが、この区内に荒川は流れていない。流れているのは隅田川である。隅田川この町の南北を縦断して流れている。この区の住人となって、もうじき 1 年になる。

最近まで、長く**外耳道湿疹**で悩んでいた。耳の入口が痒くて、指で搔くと外耳道を傷つけてしまい、耳漏が出て、しばらくするとそれが瘡(かさ)になって、また痒くなるといった繰り返しがずっと続いたのである。そして、この悪しき習慣を断ち切るためには、何より乾燥が大事なのだと思い込んでいたのであった。

ところが、ある時、掛かり付けの医師から、湿疹には、「接触」と「冷却」、そして「乾燥」がタブーなのだと聞いて動顛(どうてん)したのである。そういえば確かに東京に引っ越してから痒さの繰り返しが著しくなったようにも思われるのである。

早速、部屋の湿潤を心掛けることにした(ただ、加湿器を買うとまでは思わないが)。そのお蔭なのか、このところ外耳道湿疹は寛解状態にある。このまま自然に完治することを祈っているのだが。

銀座に出かける際には必ずといっていいくらい訪れる店舗がある。天ぷら店の「天國(てんくに)」、米菓・和菓子店の「あけぼの」、そして、文具専門店の「伊東屋」である。

「天國」で注文するのは、毎度、メニュー中の「B井」である。これには海老2尾、イカかき揚げ、穴子かき揚げ、そして野菜2点が井に盛られている。当店のこだわりだという井タレが旨い。コクがあるのにあっさりとしていて、しつこさがない。かき揚げの穴子の大きさには驚くが、胃がもたれるようなことは決してない。

~~~~~



3,190 円 (税込)

~~~~~

明治期以降の標準日本語では欧米語からの影響が著しかった。外来語として取り入れただけでなく、その翻訳の過程でも多くの新語が造られた。訳語には漢語が用いられることが多かった。欧米から入ってきた新しい概念のほとんどすべてを中国語の漢字を借りて訳した上で日本語の中に取り込み、日本語自体の近代化が図られたのである。

たとえば、「社会」「市民」「権利」「意識」「心理」「存在」「自然」などといった概念は、実はそのすべてが英語から取り込まれたもので、明治期における漢語仕立ての翻訳語なのである。これらは、江戸時代までの日本語には存在しなかった概念

である。翻訳語によって、日本人は西洋の概念を自分のものとすることに成功したわけである。

日本国家を天皇を家長とする「家」に見立て、国民それぞれの「家」における戸主＝家長への孝を天皇への忠に有機的に結びつけようとする「家」(家族) 国家観は、明治 23 年 (1890) 発布の教育勅語に示され、国民統合のイデオロギーとして鼓吹された。
(『日本人の姓・苗字・名前』吉川弘文館、2012)

…新戸籍法では、戸籍編製の単位が「家」に代わって、「夫婦及びこれと氏を同じくする子」となった。…「家」制度における氏は「家名」であったが、それが廃止され、氏は理論的には個人の名称となった。しかしながら、戸主に代わって戸籍筆頭者が設定され、その配偶者は戸籍筆頭者と氏を同一にし、子は父母の氏を称することになっているので、「同一戸籍同一氏」となり、単なる個人の名称にとどまらない性格を備えている。

「富山大空襲」とは、1945 年 8 月 1 日から 2 日にかけて、米軍が富山市に対して行なった空爆のことである。軍需工場域ではなく、市街地をターゲットとし、意図的に民間人に向けて行なわれたもので、あまり知られてはいないが、その後の広島・長崎への原爆投下を除き、地方都市としては最大の被害をもたらした空爆であった。

来襲したのは B-29、計 182 機で、M50 焼夷弾、約 50 万発が投下されたという。市街地の 99.5%が焼失し、死傷者は 10,000 人を超えた由である。当地では犠牲者の鎮魂を祈る思いを込めた花火大会が例年 8 月 1 日に開催されてきた。しかし、今年はコロナ禍のため中止となった。